

恩返し

高山 幸大

小さな恩返しを一つするたびに日記帳に書かれた日記が一つずつ消えていく。この日記はクニさんが付けていたもので、俺が生まれた日から幼稚園に入学する日までのことが記されている。俺がクニさんを連れて甘いものを食べに外出した日は『今日は一緒に喫茶店に出かけてプリンを食べた。満面の笑みでスプーンを口に運ぶのを見て私も嬉しくなった』と書かれた文字が消えて白紙になった。

幼い俺がクニさんにやってもらったことを日記に倣って同じようにしてあげるとその箇所が消えるのだ。この日のクニさんはサクラランボが載ったプリンを前に子どものようにしゃいでいた。

クニさんは俺が家を出て以来一人で暮らしていた。これまでは近隣の親戚に目をかけてもらっていたが、高齢となり一人でいる時の転倒や火の不始末などが急に重なってきた。連れて行った病院で診断された病名は俺が勘付いていた通りアルツハイマーだった。常に誰かがそばにいないと駄目だと考えた俺は勤めている会社を辞めて在宅仕事を探し、暫く振りにクニさんと暮らすことを決断したのだ。新たに始めた仕事は職種も報酬も本意ではない選択だったが止むを得ないと覚悟した。

クニさんは俺の母の叔母にあたる。俺を妊娠してからずっと容態が安定せず、産後も入院を繰り返していた母に変わり、俺のことを赤ん坊の頃から世話してくれていた。この日記は病床の母に俺の様子を伝えるためにも記録していたようだ。「アルツハイマーになる前のクニさんはいつもこれを読み返していたわ」と親戚から渡された日記帳をペラペラめくるとそこには綺麗に整った鉛筆の字で俺と一緒に過ごした日々のが記されてあった。言葉少なで穏やかなクニさんの性格がよく表れていて、いずれの日記も短文ながら和やかな文体で書かれている。

「これからは恩返ししないといけないな」。日記に目を落としながら思わずそう呟いたが、同時に俺がこの家を出る時にも同じことをクニさんに伝えていたのを思い出した。その時のクニさんは「恩返ししないといけないのはあんたじゃない」と俺に背を向けたままで言ったのだ。いつもの声色ではなかったことを覚えている。詳しい理由を聞いたことはないが、俺が物心のついた時に父はいなかった。そして母も容態が安定しないまま俺が幼稚園に入って間もなく亡くなった。祖父母もすでに他界していたために、そこからクニさんはずっと俺の親代わりをしなくてはいけなかったのだ。苦労を背負わせた俺の両親に対して思うところがあるのも仕方がない。

また一つ、そしてまた一つと毎日一つずつ日記が消えていく。

『公園を一緒に散歩した。晴れていて風が気持ちよく、つないだ小さな手が温かかった』。この日記が消えた日はクニさんの手を引いて公園を散歩した。クニさんの顔を見上げなが

らここを歩いた記憶がうっすらとあるが、この日はクニさんが俺を見上げてあどけなく微笑んでいた。繋いだ手にふと目をやると以前は気にしていた手の甲にあるアザも深いシワや増えたシミに紛れて目立たなくなったことに気が付く。

『たどたどしい手つきで一生懸命描いた絵を上手だねとほめたら喜んだ』が消えた日、クニさんは色鉛筆で花の絵を描いて見せてくれた。過去には画家を志したこともあったクニさんだったが、震える手ではせっかくの画力も発揮することが出来ない。それでも「良く描けているね」と声をかけると得意げな表情を浮かべていた。

日記の消え方には規則性があり、日付が新しいものから順番に空白になっていく。クニさんにこの日記の不思議な現象について何か知らないかと聞いてもキョトンとしているだけなのだが、「今朝は晴れているから公園に行きたい」、「今日は絵を描きたくなった」などと日記を順々に遡りながらそこに書いてあることをなぞるように日々を過ごすのだった。

日記帳で起きている異変に気づいた時は怖くも感じたが、徐々に嬉しくなっていた。クニさんに毎日一つ恩返しできていく実感に生きがいのようなものを見出せたからだ。会社員だった頃の俺は忙殺されるばかりの毎日に仕事の成果を感じる余裕もなく虚しさを覚えていた。

それから仕事上の人間関係は希薄で、わからないことについて繰り返し質問すると嫌な顔をされるものだから気苦労したのだが、その必要もなくなり気楽になった。俺はクニさんが何を言っているのか理解できないことも多く、その都度聞き返すのだが、クニさんは不機嫌になることなどなくむしろ取り留めなく話することが楽しいのか嬉々として何度も同じ話を繰り返すのだ。

ただ、俺がいわゆるイヤイヤ期を迎えていた時期の日記が消え始めた頃は困惑した。クニさんは周囲に攻撃的な態度をとり続ける。物柔らかな人柄からの変貌に面食らうこともあったが、しかし日記には常に解決策が記されていて頼もしかった。

鋭い目つきをして泣き叫びながらも投げた日は『ゆっくり背中をさすると少しずつ落ち着いた』と書かれた日記を参考に同じようにした。クニさんが幼い俺をさする姿や力加減を想像しながら、時間をかけて背中に手を添えていると、クニさんの乱れた呼吸がだんだんと収まった。

『年下の子を叩いてしまい謝った』とあった日は一体何が起ころのか疑問だったが、クニさんは病院で荒れて担当の先生に手を上げてしまった。「こういうことだったのか」と心で呟きながら俺は先生に何度も頭を下げる。不謹慎ながら思いもよらない出来事が起きたことがなんだか可笑しかった。

クニさんは幼い俺にどんなに手を焼いた日であっても『元気なことがまずはおうれしい』などと前向きな一文を日記に添えていた。どうやら俺が共感したのも消えるようで、日記に添えられたこれらの文も日々消えていく。悩ましい毎日であってもクニさんが元気なだけで嬉しく感じられたのは、次に消えると思われる日記の数々をすでに読んでいたからなのだろう。

「病状が悪化しています。先が長くないかもしれません」

先生にそう告げられた後は『よろけながら歩くようになったので支えてあげた』などが消えていき、クニさんは自分の足で歩くことも徐々に難しくなって、より多くの世話が必要となった。

俺は以前からこの日記が全て消えるとうなるのだろうかと考えていたが、クニさんが急速に弱っていったこの時期、あることに勘づいた。日記はクニさんに残された日をカウントダウンしているのではないだろうか。振り返ってみると俺がここに戻ってきた日はクニさんが日記を最後に書いた幼稚園の入学式と同じ月日（がっぴ）だったのだ。

日記を消さないように抗ったが駄目だ。空白は着実に増えていく。クニさんのことを四六時中目にかけていたつもりだったが、僅かに目を離れた瞬間に事が起きてしまうのだ。『のどを詰まらせそうになった』や『おもらしをしてしまった』とあった日記を次々に消してしまった。

クニさんが熱を出した日があった。日記を読み心構えをしていたので、俺は落ち着いて病院に連れて行くことができたのだが、しかし、この日記を書いた日のクニさんは俺とは違っただけでひどく動揺していたようで珍しく長文で記されていた。『高熱を出した坊や、今の時代であれば事なきを得るだろうけど助けることができなかつた。医者が戦地にかり出されていたから』とあり『同じ目にあわせなくてよかった』と続いていた。クニさんが戦時中に夫を亡くしていたのは知っていたが、実は息子も亡くしていたようだ。俺の母親に伝えた言葉なのだろうか、最後に『生まれてすぐに引き離されたけど、それでも私は親子になれてよかったと思えているわ』とあったがこの一文だけは消えずに残る。日記が消えなかつたのはこの日が初めてだった。

日記帳に何回も記されていた『乳母車を押して公園に行った』も最後になった日、車椅子を押してクニさんを公園に連れて行く。今のクニさんは俺に対して何も要望をしてこないので日記に沿う必要はないのだが。クニさんは俺を見上げることはなくただ前を向いていた。その後ろ姿を見ているうちに多忙を言い訳に折り返さなかつた留守番電話の声をふと思いつき出し、それが頭の中で繰り返された。その日を境にクニさんはほとんど動かなくなる。

横たわったままになったクニさんのそばで過ごす日々。『うっすらとした笑顔を見せた』、『何かを伝えたいような表情をしている』などの日記が消えて、そして『今日は一日中、寝顔をただ眺めていた』が消えた。一緒にいれるのはあと二日間だけだ。目も開けずただ眠るクニさんの横で日記帳を開き、そう覚悟をしたのだった。

ところが肩すかしを食うことにある。その翌日にクニさんは亡くなったのだ。『泣いていたが背中をさするとゆっくりと眠りについた』が消えた日のことだ。

誕生日を迎えた日の夕方、俺は骨壺を抱いて火葬場から家路につく。遺骨にはまだ火葬時の熱が残っていて、陶器越しにほのかな温もりが腕に伝わってくる。人気のない通りで西日が街の全ての影を伸ばす中、久々に履いた革靴で踏むアスファルトに心地悪さを感じていた。

古びた病院の脇を通り過ぎようとした時だった。骨壺が突如柔らかくなりその抱き心地が変わる。腕の中に目をやると小さな拳を強く握りしめた赤ん坊、それを抱きしめる俺の手の甲にはあざが見えた。目を上げるとそこはアイボリー色が覆う病室で俺によく似た男とその奥でベッドに横たわる女がこちらを見ている。その光景に見入っている内に幾ばくかの時間が過ぎていたが、腕の中の赤ん坊が徐々に熱を失っていき、それにあわせて視界がぼんやりとして、気がつくとも再び通りに立っていた。

冷め切った骨壺を抱えた俺は踵を鳴らす。最初のページにあった『この子を抱いて救われた気分だ』を含め日記帳の全てが消えていた。